

1

ガラスの向こうは、オフィス街の大通り。行き交う人の合間を抜けて、老婦人がこの建物に入ってくる。

受付のカウンターに近づいてきた彼女に、私は笑顔で声をかける。「こんにちは」

シックなスーツに身を包んだ上品そうなご婦人。あまりオフィスに似つかわしい風貌の人でもないし、地主さんか何かだろう。

期待が高まる。

「中井専務とお約束しておりました、宮下でございます」  
専務。重役クラスだ。一気に私の胸の鼓動は早くなる。

「かしこまりました。少々お待ちください」

手元のファイルを確認する。名前もある。しつかり十三階会議室の予約になっている。よし。私は心からの笑顔で、左手側を手で示して言う。

「ありがとうございます。それでは右手エレベーターホールから、十二階受付までお越しください」

「ありがとうございます」

私は笑顔で一礼してから、内線電話を手取る。番号は二二〇一。一コール目。早く聞きたい。二コール目が始まる前に電話が取られる。

「はい、十二階受付今橋です」

電話越しに、夏の終わりに鳴る風鈴のような、よく通る澄んだ声。彼女の小さな影を思い起こす。

「お疲れ様です、一階早坂です。中井専務とご予約の宮下様、いらっしやいましたのでよろしくお願ひします」

「ご予約の宮下様です。かしこまりました、失礼します」  
はあ。いつ聞いても、素敵な声。

フロアとシフトが別だから、本人に会った回数は数回ぐらい、喋ったことはないから、どんな人かは分からないけれど。電話するだけで平常心を失うぐらいには、可愛らしい声だ。

その先は、わからない。

あえて仲良くなりたいとは、不思議と思わない。本人も可愛い人だったはずなんだけれども。何なんだろう。

「早坂さん、どうしたの？」

隣で不安げに見つめる先輩。よほど呆けていたらしい。

「あ、大丈夫です……」

そうだ、お仕事申だった。

この会社には三つ受付がある。ここ一階の受付を経由して、普通のお客さんは三階の受付へ、お偉い方々とのお約束のお客さんは十二階の受付へと向かうことになる。

そんなわけで、一階担当であるところの私が今橋さんと電話するチャンスは、基本的にお偉方へのお客さんを取り次ぐ時だけである。

……もう二人ぐらい来ないかなあ。上階のお客さん。

\*

夕刻。今日は週に一度の定時退社日。そして、それは異常なまでに厳格だ。全てのフロアから社員が追い出され、エレベーターも全て停止する。

そこで何が起こるかと言えば。